

海を渡った広島方言

—海外日系移民社会における方言の継承と変容—

中 東 靖 恵

1. 海を渡った広島県移民とことば

2018年、ハワイ移民は150周年、ブラジル移民は110周年を迎えた。アジア・太平洋地域、南北アメリカなど、かつて多くの日本人が海外へ移住したが、現在も約380万人の日系人(2017年度推定¹⁾)が暮らしている。移民とともに海を渡った日本の各地方言は、移住先での方言間接触や、移住先の言語との接触・混交により、継承されながらも変容していった。広島県は全国一移民を輩出した「移民県」として知られ、戦前戦後合わせ、約11万人が海外へ移住した。現在でも世界各地に「広島県人会」が組織され、県人会ネットワークを通じた母県との交流活動が行われている²⁾。

1.1 ハワイ

広島県移民はとりわけハワイに多く³⁾、1924年のハワイ在住日本人の出身都道府県別人口統計によれば、戦前移民1世116,615人のうち、広島県出身者は最多の30,534人で全体の26.2%を占める(ハワイ日本人移民史刊行会編1964:314)⁴⁾。そのため、ハワイの日本語には、例えば「ミヤスイ(たやすい)」「エライ(苦しい)」「コマイ(小さい)」「ツカーサイ(下さい)」などの語彙や、「今日はノー、頭が痛いケンノー、仕事を休モー思う」のような間投助詞「ノー」、接続助詞「ケン」、格助詞「ト」の省略など広島方言の特徴が多く見られたという(比嘉1972:229)。

比嘉(1983)によれば、ハワイで最多の広島県移民に山口県からの移民も合わせれば(注4参照)、ハワイ日系移民の約5割が中国方言地域の出身者となり、かつ、彼らが先着者であったこと、そして中国方言が全国共通語と類似性の高い方言であったため、中国方言がハワイの日本語における共通語の基盤となったという。

また、ハワイ日系社会では、日本人移民がもたらした方言交じりの日本語と、ハワイの英語やハワイ語との言語接触⁵⁾も盛んに行われた(小林1982)。小沢編(1972:15)は、移住初期のハワイでの言語接触の様子を以下のように記している。

この移民の人たちは日本各地から募集されて来た者で、関東、東北、関西、九州と、その語る言葉を方言で話し、互に通じないため、自分の出身地の者同士が寄り合って、お国

訛りの放談をするのであった。こうした社会に育つ子供は大体は親の言葉を中心にして色々な方言を覚え、それに、子供には人種国境はなく、ハワイ原住民、支那人、白人など同じ所に住む各国人種の子供と交じって、相手の言葉を敏感に受けとって、互いに自分の意志表示をする。ここに子供の社界の生活語がつくられる。

「パパ、ハナ・ハナ。ハウス・オラン。」パパは英語*Papa*。ハナ・ハナはハワイ語*Hana hana*で仕事。ハウスは英語*House*。おらんは日本語のいません。

「お父さんは仕事へ行って、家にいません。」

1.2 ブラジル

日系人口最多を誇るブラジルにも、広島県から多くの日本人が移住した。戦前移民186,266人のうち、熊本県19,804人(10.6%)、福岡県15,959人(8.6%)、沖縄県14,271人(7.7%)、北海道13,033人(7.0%)、広島県12,687人(6.8%)、福島県9,999人(5.4%)出身者が上位を占める(ブラジル日系人実態調査委員会編1964)。比嘉(1983)は、ブラジル日系移民の場合は、どの方言出身者も移民全人口比の1割に満たなかったため、ハワイとは違い、ブラジルの日本語において共通語の土台となる有力な地域方言がなかったという⁶⁾。半田(1952:7-8)はブラジル各地における移民たちの日本語の様相を次のように語る。

ブラジルに於ける日本語は、何よりもまず、労働移民の使用するコトバだということである。そして、日本全国から集った移民の方言がまじり合つてその中でなるべく一般的にわかりやすいコトバだけが通用することになつて存続しているのがわれわれの日本語である。しかしわれわれの移民のコトバはまだ決して北海道(?)のように一つの統一体とはなっていないで各地方で最も數的に又文化的に優力な縣のコトバが主体となつてそれに各縣の方言がまじり合つていることが観察される。たとえばこれをノロエステ地方についてみるとリンス、プロミツソンは九州辯が多分にまじつて一つの標準化が行われているし、アラサツバでは東北なまりがきかれるという具合である。サンパウロ市などではやや北海道的標準化をたどつているように思えるが、ピニエイロス區などへ來るとコチア出の人が多いために四國辯が混つているように思う。

ブラジルに渡った日本人移民の多くは、当初、短期的な出稼ぎを目的に、サンパウロ州奥地のコーヒー耕地の契約労働者として働いた。耕地にはブラジル人だけでなく、イタリアやドイツなどヨーロッパからの外国人労働者も多く、日本人移民たちは、生きていくための手段としてポルトガル語を必死で学ぼうとした。日本人同士が集まれば習ったポルトガル語を互いに教え合い、互いに知っている単語は日本語を使わずにポルトガル語を使ったという(青柳1941)。初期移民の言葉として、半田(1970:127)は次の例を挙げる。

「あの監督はbravoじゃけん、めったなことは言えん。Não pode, filho da mãe!」⁷⁾

日本人移民のポルトガル語は、耕地に住むブラジル人やヨーロッパ移民との接触によって自然習得したものであり、かつ、下層労働者階級のしゃべるポルトガル語であったため、悪口や俗語が多く含まれていたという。また、移民の多くが地方出身者であったため、その日本語は各地方言色の強いものであった。

ブラジルで生活するうえで、日本語にポルトガル語が混ざることとはごく日常的なことであり、このようなポルトガル語混じりの日本語は、戦前、「日伯混合語」などと呼ばれていた。しかし、日本の敗戦を機に、ブラジルに永住するという意識が次第に醸成されていく中で、ブラジル人として成長した子弟たちを含めた日系社会は「コロニア(colônia)」、日伯混合語は「コロニア語」と呼ばれるようになった(中東2018b)。

1.3 パラグアイ

ブラジルと同じく、南米のパラグアイにも広島県移民が多く暮らしている。パラグアイへの日本人の集団移住は、1936年に建設されたLa Colmena移住地への入植(Stewart 1967)に始まり、2016年に移住80周年を迎えた。戦前、パラグアイへ移住した日本人は約790人だが、パラグアイ日系移民の大半が1953年以降入国した戦後移民である。戦前戦後合わせ約8,000人の日本人がパラグアイへ移住した。そのほとんどが、日本政府による全面的支援のもとに行われた集団開拓農業移民であった。

戦後移民7,177人のうち、高知県1,079人(15.0%)、北海道753人(10.5%)、岩手県588人(8.2%)、愛媛県509人(7.1%)、福岡県502人(7.0%)、広島県486人(6.8%)出身者が上位を占める(パラグアイ日本人会連合会編2007)。戦後1956～1957年に、広島県沼隈郡沼隈町(現福山市沼隈町)の初代町長神原秀夫によって「町ぐるみ集団移住」が推進されたLa Paz移住地(移住当初はFram移住地)には、在パラグアイ広島県人会(1960年創立)が置かれ、現在でも広島県人家族が比較的多く暮らす(フラム移住地入植30周年記念誌刊行委員会編1986、ラパス移住地入植50周年史編纂委員会編2006)。

以下は、筆者が2009年に調査で訪れた際に聞かれた広島方言を含む日本語とスペイン語交じりの発話である。[]には日本語訳、【 】には発話者の属性を付した。

- (1) Usted[あなた]はどこに住んどったんか。【1世・男性】
- (2) うちのseñora[妻]に聞いてみると分からん。【1世・男性】
- (3) (運動会で)Yo[私]の番だと思って走ったら…【3世・女性】
- (4) ここにはmaíz[とうもろこし]植えとるよ。【2世・男性】
- (5) (筆者に対し)先生はtranquilo[穏やか]じゃ。【1世・男性】
- (6) (筆者の発言に対し)Si. Si.[はい。はい。]ほいでの一、先生。【1世・男性】

パラグアイは人口685万人(2016年パラグアイ統計局)のうち、約95%がグアラニー系の先

住民族とスペイン系の白人との混血 (mestizo) であり、公用語はスペイン語とグアラニー語 (Guaraní) である⁸⁾。スペイン語のモノリンガルはごくわずかで、国民の大半がスペイン語とグアラニー語のバイリンガルである (Rubin1968、Lipski1994、田島1996)。したがって、パラグアイ日系社会においては、日本人移民の方言間接触に加え、スペイン語、グアラニー語との接触が行われていることになる。

2. 海外日系移民社会における方言の継承と変容の研究を行うにあたって

1980年代以後、海外移住の時代は終焉を迎え、日系社会における世代交代による言語シフトの進行と日本語の衰退は著しい。世界最大の日系人口を誇るブラジルにおいても、すでにポルトガル語への言語シフトは完了している。戦後移民の多いパラグアイ日系社会では、農村部の日系移住地においては現在でも日系コミュニティの結束力が強く、生活言語として日本語が機能し、若い世代でも日本語能力が高いことで知られる (石田1995、国際協力事業団1990)。だが、1世から2世・3世への世代交代とともに、日本語からスペイン語への言語シフトが現在進行中である (パラグアイ日本人会連合会編2017)。

パラグアイにおいても、ブラジルと同様、移住当初はより良い土地や生活の向上を求めて移動が頻繁に行われた。日系移民の言語の継承・変容の実態を把握する場合、ある特定の地域の言語を観察対象にするのではなく、移動・定着が行われてきた家族、あるいは同県人での言語を観察する方が、移民言語の実態を調査する方法として現実に即しているのではないかと、さらに、日本国内で行われた研究と比較対照することで、その特徴がより鮮明に浮かび上がるのではないかと考えた。日本国内では戦後、全国共通語化をはじめとする言語変化が顕著となったが、海外日系移民社会において、日本語はどのように継承され、変容しているのだろうか。

そこで、①日本語の調査を行えるだけの高い日本語能力が保持されており、②移住先での移動・定着が行われて来た家族あるいは同県人単位での言語観察が可能であり、かつ、③日本国内における言語調査との比較対照が可能である研究対象として、パラグアイ日系社会に暮らす広島県人家族における広島方言アクセントの継承と変容に関する調査研究を行うこととした。

広島市方言ネイティブである筆者は、かつて恩師とともに、以下(1)～(3)に示した広島市および山陽地方における方言アクセントの世代的・地理的動態に関する調査研究を行った。

(1) 広島市方言アクセント調査とアクセントの世代的動態研究 (馬瀬・小橋・竹田・中東1995) : 1993年7～8月、広島市 (安芸郡府中町・海田町も含む) 生育の1998～1981年生の男女159名を対象に138項目を調査。調査項目のうち、2・3・4音節⁹⁾名詞、外来語、3音節形容詞 (言い切り形・連体形・過去形・ウ音便形・仮定形)、複合動詞のアクセントの特徴と世代的変動を中心に考察。

(2) 『広島市方言アクセント辞典』 (馬瀬編1994) の資料に基づくアクセントの世代的動態研究 (馬瀬・竹田・中東1995c) : 1994年、広島市生育の世代を異にする男女9人 (1907～1972年生) を対象に約12,000語を調査・採録した『広島市方言アクセント辞典』の中から、2・3・4音節名詞、

外来語、地名、3・4・5音節以上の形容詞、単純動詞、複合動詞、副詞のアクセントの特徴と世代的変動を中心に考察。

(3) 『山陽地方岡山—広島—下関ライン方言アクセントグロットグラム(地理年代図)集』(馬瀬・竹田・中東1995a)の資料に基づく岡山—広島—下関間方言アクセントの世代的・地理的動態に関する研究(馬瀬・竹田・中東1995b):1994年7月~9月、岡山—広島—下関間63地点において、4世代(20~70代)252名を対象に175項目を調査。調査項目のうち、1・2・3・4音節名詞、月名、地名、存在動詞、複合動詞、動詞否定形、3音節形容詞(言い切り形・連体形)のアクセントの特徴と地理的・世代的動態を中心に考察。

パラグアイ日系移民社会において、広島県移民によって持ち込まれた広島方言アクセントはどのように継承され変容しているのか。以下で述べる調査研究は、かつて筆者が行った上掲(1)~(3)の広島市および山陽地方における方言アクセントの世代的・地理的動態に関する調査研究の海外フィールドにおける発展と展開として位置づけられるとともに、パラグアイ日系社会に暮らす広島県人家族を対象に行ったアクセント調査の結果から、海外日系移民社会における移民言語としての方言の継承と変容の様相を具体像として描き出したものである。

研究成果の一部は、すでに中東(2011, 2018a)で公開しているので本稿と合わせてご覧いただきたい。また、本調査では方言アクセントの継承と変容に関連して、発音の調査もわずかながら行っている。本稿ではその資料の一部も報告する。

3. パラグアイの広島県人家族における方言アクセント・発音の継承と変容の実態

3.1 調査の概要

- (1) 調査地域: パラグアイ南部Itapúa県La Paz移住地(1955年Fram移住地として創設。1989年La Paz市制施行に伴い改称)およびChavez移住地(1953年創設)。
- (2) インフォーマント: 調査地域在住の広島県移民(1世)とその家族(2世・3世)。在パラグアイ広島県人会より紹介してもらった。
- (3) 調査方法: 面接調査。個人的属性、学歴、日本語・スペイン語の言語能力意識、日本語・スペイン語のメディアとの接触、日常生活における言語使用等について聞き取りを行った後、調査語(アクセント195項目:1・2・3・4・5・6拍名詞、月名、地名、外来語、副詞、オノマトペ、疑問語、複合動詞、動詞否定形、3拍形容詞など、発音11項目)について、語単独あるいは調査語を含む短文(ルビ付き漢字仮名交じりで表記)を、調査語の意味を表す絵とともに示し、通して二度読み上げてもらい、ICレコーダー(TASCAM DR-07)に録音した。
- (4) 調査期間: 2009年8月3日~8月14日。

3.2 インフォーマントの世代ごとの属性と言語的背景

インフォーマント数は合計44人(男21人、女23人)であった。分析に際しては、前節で述べ

た広島市方言アクセント調査とアクセントの世代的動態研究(馬瀬・小橋・竹田・中東1995)で用いた出生年による世代区分に従った¹⁰⁾。各世代区分に該当するインフォーマントの属性(生年・平均年齢・世代¹¹⁾)と調査人数を表1に示す。広島市での調査では第Ⅰ～Ⅶ世代に区分されたが、パラグアイ調査では第Ⅰ・Ⅱ世代は高齢のため該当者がおらず、新たに第Ⅷ・Ⅸ世代の若い世代が加わっている。

区分	生年	平均年齢	世代	人数(男女別)
第Ⅰ世代	1898～1909年	(該当者なし)		
第Ⅱ世代	1910～1921年	(該当者なし)		
第Ⅲ世代	1922～1933年	80.9歳	1世(成人移民)	7人(男3、女4)
第Ⅳ世代	1934～1945年	70.3歳	1世(成人移民)	3人(男1、女2)
第Ⅴ世代	1946～1957年	58.8歳	1世(子供移民)	6人(男4、女2)
第Ⅵ世代	1958～1969年	44.3歳	2世	6人(男5、女1)
第Ⅶ世代	1970～1981年	34.5歳	2～2.5世	4人(男0、女4)
第Ⅷ世代	1982～1993年	20.8歳	2～3世	12人(男4、女8)
第Ⅸ世代	1994～2005年	12.3歳	3世	6人(男4、女2)

表1 インフォーマントの世代区分・属性・調査人数

世代ごとの通学歴(第Ⅴ～Ⅸ世代はパラグアイのスペイン語学校とともに日本語学校で学んでいる)、日本語・スペイン語の言語能力意識(聞く・話す・読む・書く)、日本語・スペイン語のメディア視聴(テレビ・ラジオ・DVD／ビデオ・歌・雑誌／漫画・本・新聞・インターネット)、家庭内・友人間・日系団体での日本語・スペイン語の使用について、概略を表2に示す。なお、インフォーマントの中には言語形成期における日本在住経験者はいない。

区分	通学歴	日本語・スペイン語 言語能力意識	メディア接触	家庭内・友人間・日 系団体での言語使用
第Ⅰ世代	(該当者なし)			
第Ⅱ世代	(該当者なし)			
第Ⅲ世代	日本のみ	日本語はできるが スペイン語はほとんどできない	ほぼ日本語	ほぼ日本語
第Ⅳ世代				スペイン語より 日本語のほうをよく使う
第Ⅴ世代	日本・パラグアイ 両方	スペイン語より 日本語のほうがよくできる	日本語・スペイン語 の両方	日本語・スペイン語の両方
第Ⅵ世代	パラグアイのみ	日本語より スペイン語のほう よくできる		日本語・スペイン語 の両方
第Ⅶ世代			日本語・スペイン語の両方	
第Ⅷ世代			日本語・スペイン語の両方	
第Ⅸ世代	日本語・スペイン語の両方	日本語・スペイン語の両方	日本語・スペイン語の両方	日本語・スペイン語の両方

表2 インフォーマントの通学歴・言語能力意識・メディア接触・言語使用の概略

3.3 方言アクセントの継承と変容の実態

広島県方言アクセントは全域東京式であり、型の種類は共通語・東京語¹²⁾と同じである。県内の地域差(安芸地方／備後地方など)もあるが、地域を問わず若い世代での共通語化は著しい。ここでは、調査語の中から、2・3・4拍名詞、外来語のアクセントを取り上げる。

表3に調査語数と調査の結果を、①世代的変動の見られない語、②世代的変動がいくらか見られるものの、全体的には第Ⅲ・Ⅳ世代の持つ伝統的アクセント型が優勢な語、③世代的変動が顕著に認められる語に分類して示す。表3の括弧内の数字は、アクセント核の位置を語頭から数えた拍数によって示したものである。②欄内、括弧内／の左に第Ⅲ・Ⅳ世代の伝統的アクセントを「伝」として示し、括弧内／の右には第Ⅴ世代以降で世代的変動が見られるアクセントの型を数字で示した。

	①世代的変動の見られない語	②第Ⅲ・Ⅳ世代の伝統的アクセントが優勢	③世代的変動が顕著な語
2拍名詞 42語	飴, 牛, 鼻, 水, 風 (0), 空, 箸, 松, 肩, 海, 雨, 春, 窓, 秋, 夜 (1), 川, 歌, 橋, 足, 池, 波, 花, 山 (2)	糸, 板 (伝0/1, 2), 靴, 服, 旗, 梨, 蝉, 夏, 冬 (伝 2/1, 0)	神, 雲, ねじ, 熊, 嘘, 匙, 火事 (2>1), 北, 人, 上 (2>0)
3拍名詞 40語	形, 印, 隣, 背中, う さぎ, 桜 (0), 天気, 料理 (1), ひとり, 五つ, お菓子 (2), 醤油 (3)	苺, 葉 (伝0/2), から す (伝1/2), 朝日 (伝 2/1, 0), 心, 力 (伝 2/3, 0), ふたり, 言 葉, 男, 頭 (伝3/2, 0), 女 (伝3/1, 0), 卵 (伝 2/0)	りんご, 電話, 後ろ (1>0), 命, 涙, めがね, もみじ, きのこ, 家族 (2>1), 時間, 国語, 着物 (2>0), 東 (3 >0), 会議 (3>1), はさ み, 鏡 (3>2)
4拍名詞 27語	七夕, 友達, 新聞, 学 校 (0), あいさつ, 全 国 (1), 紫, 九つ, 手 袋 (2), 弟, 妹 (4)	ひらがな (伝3/0), 色 紙, 味噌汁 (伝3/2, 0), 先生 (伝3/0, 1), 生 け花 (伝2/0)	神様, 富士山 (2>1), 足音, 金持ち, 年寄り, ものさし, のこぎり, 腰かけ (4>3), 鉛筆, 大根 (3>0), 日本 語 (4>0)
外来語 8語	—	テレビ, ラジオ (伝1 /2), リレー, バレー, レモン, ドラマ (伝1/ 2, 0)	コップ, モデル (1>0)

表3 2・3・4拍名詞・外来語の調査語におけるアクセントの継承と変容

①②に分類される語、すなわち成人移民1世である第Ⅲ・Ⅳ世代が持つ広島方言の伝統的アクセント型が、子供移民1世・パラグアイ育ちの2～3世である第Ⅴ世代以降においても保持・継承されている語の多くは、日本国内の広島方言においてもアクセント変動の見られない語、あるいは、広島方言アクセントが共通語・東京語と同じアクセント型である場合であった。

②の調査語のうち、2拍・3拍・4拍名詞、外来語の世代的変動を1例ずつ、図1～4に示す。横軸は世代区分、縦軸は発音の割合(%)、グラフ中の数字はアクセント核の位置を語頭から数えた拍数によって示したものである(以下同じ)。

一方、③アクセントの世代的変動が顕著であり、若い世代でアクセントの新旧交代が見られる語の場合、その多くが、日本国内の広島方言においても同様なアクセント変動を見せる語であった。2拍・3拍・4拍名詞、外来語の例を図5～8に示す。

では、パラグアイの広島県人家族におけるアクセントの世代的変動と、日本国内の広島方言におけるアクセントの世代的変動を比較してみよう。2・3・4拍名詞の調査語のうち、③アクセ

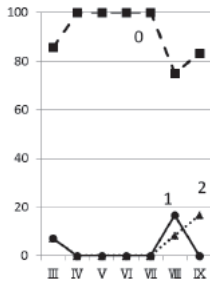


図1「板」(パ)

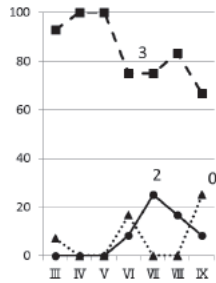


図2「言葉」(パ)

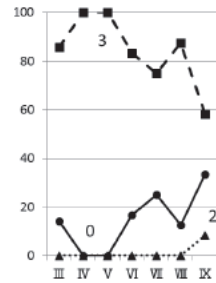


図3「ひらがな」(パ)

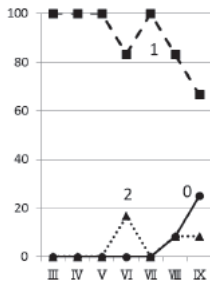


図4「リレー」(パ)

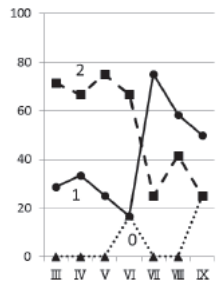


図5「ねじ」(パ)

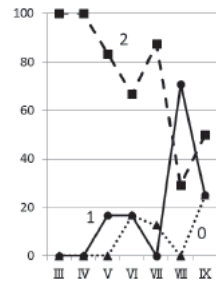


図6「もみじ」(パ)

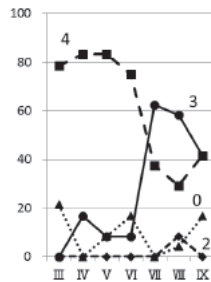


図7「ものさし」(パ)

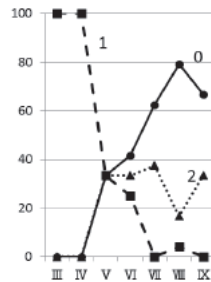


図8「モデル」(パ)

セントの世代的変動の顕著な語について、2拍名詞5語「ねじ、熊、嘘、さじ、火事」、3拍名詞5語「命、涙、めがね、もみじ、きのこ」、4拍名詞5語「足音、金持ち、年寄り、ものさし、のこぎり」の結果を総合したものをそれぞれ図に示す。図9～11は1993年に広島市で行った調査(馬瀬・小橋・竹田・中東1995)の結果、図12～14はパラグアイでの調査結果である。2拍名詞における尾高型2>頭高型1、3拍名詞における中高型2>頭高型1へのアクセント変動は共通語化であり、4拍名詞における尾高型4>中高型3への変動は、共通語における新しい優勢なアクセント型への変化である。

広島市方言では第IV世代から緩やかに始まり、第V～VI世代以降で急速に進むアクセント変動により、X状のラインを描いて新旧アクセントが交代するが(図9、図10、図11)、パラグアイでは広島市方言よりも複雑な様相を呈しながら、世代的には少し遅れて、第V～VI世代で緩やかにアクセント変動が始まり、第VII～VIII世代で加速し、広島市方言と同様なアクセントの新旧交代を見せる(図12、図13、図14)。

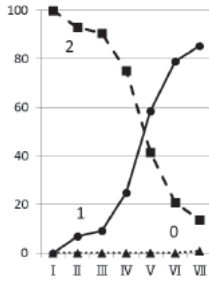


図9 2拍5語総合(広)

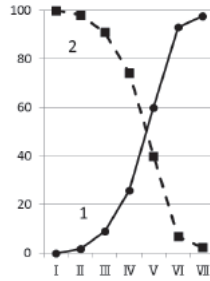


図10 3拍5語総合(広)

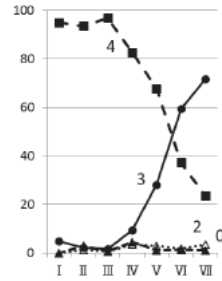


図11 4拍5語総合(広)

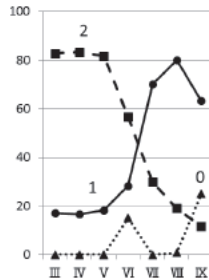


図12 2拍5語総合(パ)

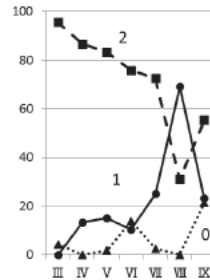


図13 3拍5語総合(パ)

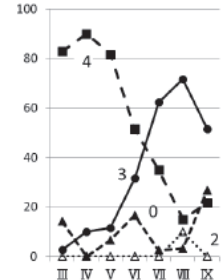


図14 4拍5語総合(パ)

外来語アクセントも同様、「モデル」における頭高型1>平板型0へのアクセント変動は、第V～VI世代で始まり、第VII～VIII世代で顕著となる(前掲図8)。広島市方言における外来語アクセントの平板型化現象(図15)は、海を隔てたパラグアイ日系社会でも見られるのである。

すなわち、この調査で得られた結果は、日本国内の広島方言で起きているアクセント変動が、「日本から最も遠い日系移住地」と言われるパラグアイ日系社会に暮らす広島県人家族にも同様に起きていることを示しており、これまで全く知られていなかったパラグアイ日系社会の日本語の姿の一つとして、特筆すべき事実である。

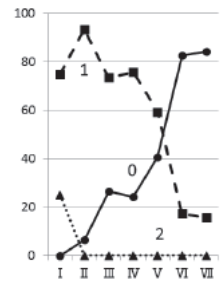


図15 「モデル」(広)

3.4 方言アクセントの継承と変容をもたらす諸要因

では、このようなアクセント変動を促す背景には何があるのだろうか。広島市のテレビの普及は1955(昭和30)年頃から始まり、上皇(当時の皇太子)ご成婚の1959(昭和34)年にピークを迎え、東京オリンピックが開催された1964(昭和39)年で普及は完了する。言語形成期を3、4歳～13、14歳とすると、第I～IV世代(1898(明治31)～1945(昭和20)年生)のインフォーマントは、概ね言語形成期が終わってからテレビに接触した世代だが、第V世代(1946(昭和21)～1957(昭和32)年生)は言語形成期の途中で、第VI世代以後(1958(昭和33)年生～)は言語形成期の初めからテレビに接触した世代となる。したがって、第V世代から急速に共通語化(新しいアクセントの獲得)が進むのは、言語形成期におけるテレビの接触による影響である蓋然性

が高いと考えられる(馬瀬・小橋・竹田・中東1995)。そして、これと同様なアクセント変動は、広島市だけでなく周辺の山陽地方においても同様に観察される(馬瀬・竹田・中東1995a、1995b)。

一方、海を隔てたパラグアイ日系社会におけるアクセント変動には、どのような要因が関わっているだろうか。ここではそれぞれの世代の言語形成期・学齢期における言語環境と教育環境の観点から考えてみたい。

第V・VI世代が言語形成期を過ぎた時期は、日系社会の多くが1世で構成される日本語中心社会であり、かつ、移住地内にスペイン語・日本語学校は存在したが、まだ十分整備されていなかった。移住地外の中学・高校へ進学した人もいるが、学歴はそれほど高くなく、移住地外での生活も長くない。そのため、緩やかな変動を見せつつも、親世代である第III・IV世代の伝統的な広島方言アクセントをよく保持していると考えられる。

これに対し、孫世代に当たる第VII・VIII世代において、共通語化を含めた新しいアクセントの獲得が顕著に見られるのには、言語生活を取り巻く移住地での大きな変化が関わっていると考えられる。一つは1980年代から始まる移住地の電化・インフラ整備により、テレビ・ビデオの安定的視聴、NHK海外衛星放送の受信(1997年～)、インターネットの利用(1999年～)が可能になったことである。もう一つは、1980年にパラグアイ日本語教育研究協議会が発足し、日本語教育の質的向上に努めるとともに、JICAによる日本語教師派遣事業の開始により、日本から派遣された日本語教育の専門家から直接日本語を習うことが可能になったことである。

主に1980年代以降始まった人的交流による「日本の日本人」との接触や、テレビ、ビデオ、DVD、インターネット等のメディアを通じた「日本の日本語」との日常的接触は、移住地の日本語環境に大きな変化をもたらし、この時期に言語形成期・学齢期を迎えた第VII・VIII世代における日本語能力の維持・向上を助けるだけでなく、日本語の新しいアクセントの獲得にも大きく寄与したものと考えられる。

とりわけ第VIII世代においては、その多くが移住地外を離れたパラグアイの大学に進学している高学歴者であり、高いスペイン語能力を有するにもかかわらず、高い日本語能力をも有し、アクセント調査においても新しいアクセント型の割合がどの世代よりも高い。日本語学校卒業後も高い日本語能力を保持し、新しいアクセントを獲得しているという事実は、日系移住地内において日本語が必要とされる環境に生育し、言語形成期に生活言語として運用するに十分な日本語能力を身に付けている上に、日常生活における日本語メディアとの接触頻度が総合的に高いことや、聞き取り調査の中で、彼らの多くがインターネットを通じ日本語のニュースやドラマを日常的に視聴していると回答していることから窺い知ることができる¹³⁾。

だが、こうした高い日本語能力の保持は最も若い第IX世代において少し危うくなっており、アクセントの型区別が曖昧であったり、型区別を消失し、調査語の多くを同じパターンで発音する傾向のある者が見られた。移住地と都市部とのアクセスが容易になったことで、移住地からの人口流出が加速化するだけでなく、1992年に公用語となったグアラニー語の教育が1994年から始まり(青砥2008)、場合によっては英語学習も加わり、日本語学習に充てる時間がさら

に減少するなど、今後、世代交代とともにスペイン語への言語シフトが進行し、移住地の言語生活は大きく変貌していくのではないかとと思われる。以上のようなパラグアイの広島県人家族におけるアクセントの継承・変容の世代的推移をまとめると表4のようになる。

日本生まれ	第Ⅲ・Ⅳ世代	1世(成人移民)	【伝統アクセント母語世代】
	第Ⅴ・Ⅵ世代	1世(子供移民)・2世	【伝統アクセント保持世代】
パラグアイ生まれ	第Ⅶ・Ⅷ世代	2世～3世	【新アクセント獲得世代】
	第Ⅸ世代	3世	【アクセント型消失世代】

表4 パラグアイの広島県人家族におけるアクセントの継承・変容の世代的推移

3.5 発音の継承と変容の実態：「10本」「10回」における「10」の発音

本調査の主な調査項目はアクセントであるが、発音についても若干調査を行っている。ここでは「10本」「10回」における「10」の発音調査の結果を述べる。

「十」の直後に無声子音/p, t, k, s, h/で始まる助数詞等が続く場合の「十」の発音には、「ジッ」と「ジュッ」がある。「ジッ」が伝統的で標準的な発音であり「ジュッ」は新しい発音であるが、1966(昭和41)年の放送用語委員会で「ジッ」「ジュッ」の両様を認めることとなり、アクセント辞典では早くから両方の発音が記載されている(NHK編1985、秋永編1982)。当時の当用漢字表には「十」の発音に「ジュッ」は含まれていなかったが、広く一般に「ジュッ」が発音されている実態を考慮した結果であるという(文化庁1975、斎賀1977)。

今でも国語辞典や学校の教科書では「ジュッ」が掲載されていないものがあり(丹保1991、馬瀬1994)、伝統的な発音を重視するアナウンサーの規範意識から放送では「ジッ」が優先されることも多いが(滝島2015)、文化庁(2004)による平成15年度「国語に関する世論調査」では、「十匹」を「ジュッピキ」と発音する人が平均で75.1%にも上り、2010(平成22)年には常用漢字表の改定により備考欄で「ジュッ」の発音も認められ、2012(平成24)年度から「ジュッ」の読みを載せている国語の教科書が登場しているという(滝島2015)。

田野村(1990)によれば、大学生・短大生166人(近畿の府県を主たる生育地とする者122人を含む)に対して行ったアンケート調査の結果、助数詞が続いて促音化する場合の「十」の発音は「ジッ」3%、「ジュッ」97%であった。馬瀬(1994)によれば、信州大学人文学部学生を対象に「十階」の発音を調査したところ(調査は1989年)、94.8%の学生が「ジュッカイ」と回答、1993年に広島女学院大学で「十本」の発音を調査したところ、9割の学生が「ジュッポン」と回答している。田野村・馬瀬の調査対象者となった当時の大学生は1970年前後の生まれで、筆者がパラグアイで調査を行った2009年当時の年齢でいうと40歳前後であり、この年代ではすでに「ジッ」から「ジュッ」への変化はほぼ完了していると言える。

尾崎(2019)は、全国(2009年実施)、北海道(札幌市・釧路市・富良野市：2011～12年実施)、札幌市(1985年実施)での多人数調査において「20分」の発音を調査している。全国調査では「ニジッポン」が約2割、「ニジュッポン」が約7割であり、70代(1930年代生)では「ジッ」が多いものの、60代(1940年代生)で「ジュッ」が半数を超え、50代(1950年代生)で7割、40代(1960年代

生)で8割、30代(1970年代生)以下では9割を超える。年齢差だけでなく地域差もあり、「ジッ」の発音は中国・四国・九州でやや多い。「ジッ」から「ジュッ」への変化は北海道の札幌市・釧路市・富良野市でも見られ、「ジュ」の発音は60代で33.3%だが、50代で75.0%へと急激に増え、40代以下でほぼ定着するという。

以上の先行研究から考えれば、地域差はあるものの、「ジッ」から「ジュッ」への発音の変化は1950年代出生者ですでに新旧交代が起こっており、1970年代以降の出生者においてはほぼ完了していると言えるだろう。では、パラグアイ日系社会の広島県人家族ではどのような発音の変容がみられるだろうか。「10本」「10回」の調査結果を図16と図17に示す。

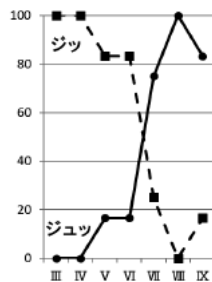


図16 「10本」 (パ)

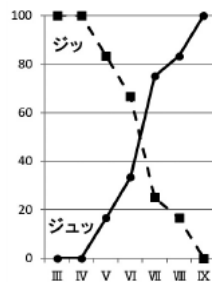


図17 「10回」 (パ)

表4で言う【伝統アクセント母語世代】である第Ⅲ・Ⅳ世代では、伝統的な「ジッ」の発音が100%を占めるが、【伝統アクセント保持世代】である第Ⅴ・Ⅵ世代では、緩やかに「ジュッ」への変容を見せつつも、親世代である第Ⅲ・Ⅳ世代の発音「ジッ」を保持している。そして、【新アクセント獲得世代】である第Ⅶ・Ⅷ世代、【アクセント型消失世代】である最年少の第Ⅸ世代において、「ジュッ」の発音の割合が一気に伸長し、劇的な発音の新旧交代が起こり、「ジュッ」への変化がほぼ完了している。

すなわち、日本の全国各地で見られる「ジッ」から「ジュッ」への発音の変化は、日本よりも世代的にやや遅れて、パラグアイ日系社会においても同様に起こっており、その世代的推移の様相は、前節で述べた広島方言アクセントの継承・変容の世代的推移とほぼ同じくするのである。第Ⅶ世代以降で起こる「ジッ」から「ジュッ」への劇的な新旧交代の背後には、3.4で前述したように、1980年以降始まった移住地の変化に伴う日本の日本語や日本人との日常的接触・交流がもたらした日本語環境の大きな変化があり、この時期に言語形成期・学齢期を過ぎた第Ⅶ世代以降に顕著な影響を与え、新しい発音「ジュッ」が獲得されたものと考えられる。

4. パラグアイ日系社会における日本語の新たな姿

2012年の夏、3年ぶりに再びパラグアイを訪れた。都市部だけでなく、農村部である日系移住地においても、1世の高齢化・減少による世代交代に伴い、日常生活における日本語使用が減少し、「移民言語としての日本語」の衰退がさらに進行している状況を肌で感じる一方で、主に若い世代において「日本の日本語」との日常的接触が以前より活発に行われている様子も目の

当たりにした。

一つには、従来、「継承語(国語)としての日本語教育」を行う日本語学校に非日系パラグアイ人が増えており、「外国語としての日本語教育」の必要性がより顕在化してきていること、さらに、スペイン語・日本語のバイリンガル校や、日本語を正規教科とする学校教育機関で日本語を学ぶパラグアイ人も増加し、パラグアイ国内で「日本の日本語」に接する機会が着実に増えていることがあげられる。

もう一つには、デカセギなどによる訪日・滞日、日本への定住化に伴う「日本の日本語」との接触と習得、それをさらに後押しするFacebook等をはじめとするSNSの急速な普及は、国や地域を越えてパラグアイ日系人のネットワークを構築する新たなコミュニケーション・ツールとして機能し、日本に暮らす家族・親戚・友人らとのコミュニケーションを行うための「日本の日本語」の習得・使用に大きく関わっていると考えられる。パラグアイ日系社会における若年層話者の日本語能力の高さと、インターネットを中心とするメディアを介した日本の日本語や日本の情報をリアルタイムに知ることができる環境は、日本や日本の日本語を身近に感じさせるとともに、日本語学習に対するモチベーション向上にもつながっていると考えられる。

海外日系移民社会における日本語の研究に関しては、日本語の衰退や言語シフトに注目されがちであるが、このようなパラグアイ日系社会における日本語のあり方やその実態はあまり知られておらず、また、同じ南米諸国であってもブラジルやペルーの日系社会とはかなり様相を異にしていることも、これまであまり指摘されていない。パラグアイ日系社会におけるこのような日本語の新たな動向は、今後も注目に値する。

謝辞

本稿は、社会言語科学会第42回研究大会(広島大学、2018年9月23日)および第27回ひと・ことばフォーラム(東洋大学、2019年3月30日)での招待発表の内容に加筆・修正を行ったものである。今から100年前の1918年夏、移民を多く輩出した広島県安芸郡仁保村出身である筆者の曾祖父母家族は、広島から海を渡り、ブラジルへ移住した。移住100周年を迎えた年に、故郷の広島で招待発表の機会をいただいたことを、学会関係者の皆様に対し心より感謝申し上げます。本研究はJSPS科研費(若手研究(B)20720140、基盤研究(C)25370590)の助成を受けて行ったものの一部である。

注

- 1) (公財)海外日系人協会「海外日系人数」より。<http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/index.html> (2019年9月30日)
- 2) 戦前戦後合わせた都道府県別移住者統計によると、第1位:広島県(109,893人)、第2位:沖縄県(89,424人)、第3位:熊本県(76,802人)、第4位:山口県(57,837人)、第5位:福岡県(57,684人)である。現在、ハワイ、北米、中南米9カ国28地域に在外広島県人会が組織されている(海外移住資料館2017)。
- 3) 広島県内でも広島湾沿岸の町村からの移民が多く、とりわけ旧安芸郡仁保島村(現広島市南区仁保)にはハワイ移民が多い(広島県編1993:72-76)。この地に1997年に開館された「ハワイ移民資料館仁保島村」(<https://hawaiiniho.com/>)には、貴重な移民関連資料が保存・展示されている。

- 4) 広島県に次いで多いのが、山口県25,878人(22.2%)、熊本県19,551人(16.8%)、沖縄県16,536人(14.2%)からの移民であった。
- 5) 1955～1990年にハワイ島ヒロで発行された邦字紙『ヒロタイムス』にも、英語、ハワイ語、ハワイビジン英語、日本語の方言が入り混じったハワイ日本語の特徴が見られるという(島田・本田2007、2008)。
- 6) 戦後移民も合わせれば、戦前移民最多の熊本県出身者の割合は1割以下となる。また、ハワイ・ブラジルの両地域において、沖縄県出身者が先着者としては最多数であったにもかかわらず、沖縄方言は全国共通語との類似性が極めて低かったために、日系社会の共通語になることはなかった(比嘉1983)。
- 7) この発話の意味は「(耕地にいる)あの監督は気が荒いから、めったなことは言えない。だめだ。あの野郎ときたら！」(半田1970:162)となる。
- 8) 外務省「パラグアイ共和国」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/paraguay/index.html>(2019年9月30日)
- 9) ここに挙げた(1)～(3)の調査では「拍」ではなく「音節」を用いている。これは広島市方言をシラビーム方言であると捉えていることによる(馬瀬1995、1996a)。
- 10) この世代区分の方法は馬瀬(1981)に倣ったものであり、「言語形成期におけるテレビとの接触」が個人の言語に影響を与えているとの仮説のもと、調査設計されたものである。国立国語研究所(1974)は1971年に山形県鶴岡市で行った言語調査の結果、「ふつう、マス・コミュニケーションは利用が高ければ高いほど共通語化が進むものと考えられているが、今回調査では、テレビの視聴時間の長いほど共通語化してないという結果が出ている」(p.287)とし、「1日にテレビを見る時間の長さ」と共通語化の程度との関係では、視聴時間の短いグループほど共通語化の得点が高くなっている。(中略) 視聴時間の長短どちらのグループでも年齢の上昇に伴って音声得点が低くなっており、(中略) 年齢の低い方ではテレビを見る時間が長いのか短いかは共通語化の程度とはあまり関係がない」(pp.177-178)との見解を述べている。馬瀬(1996b:14)はこの見解を「明言は避けているが、個人の共通語化にテレビの直接的な影響はないとする立場と受け取ることができる」とし、個人の言語に及ぼすテレビの影響を「テレビの視聴時間の長短」によって論じるのには無理があると述べる(馬瀬1981)。
- 11) 日本生まれは「1世」、パラグアイ生まれは「2～3世」であるが、両親が1世と2世の子は「2.5世」、両親ともに2世であれば「3世」とした。
- 12) 共通語・東京語アクセントに言及する場合は、NHK放送文化研究所編(1998)、秋永編(2001)、馬瀬・佐藤編(1985)に基づくこととする。
- 13) 第Ⅷ世代は日本語能力の維持・向上に対する意識も高く、聞き取り調査や日常生活での話の中で、頻繁に日本語能力試験の話題が上り、1級あるいは2級に合格していることを嬉しそうに筆者に話してくれたのが印象的であった。

参考文献

- 青砥清一(2008)「パラグアイのバイリンガル教育計画について」『神田外語大学紀要』20
- 青柳郁太郎(1941)『ブラジルに於ける日本人発展史(上)』ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会
- 秋永一枝編(1982)『明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂
- 秋永一枝編(2001)『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
- 石田 完(1995)「パラグアイにおける日本語教育の現状と課題」『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』2
- NHK編(1985)『NHK編日本語発音アクセント辞典 改訂新版』日本放送出版協会
- NHK放送文化研究所編(1998)『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』日本放送出版協会
- NHK放送文化研究所編(2016)『NHK 日本語発音アクセント新辞典』NHK出版
- 尾崎喜光(2019)「直音の拗音化と拗音の直音化に関する研究—「20分」と「宿題」の発音の動態—」『ノートルダム清心女子大学紀要』43(1)
- 小沢善浄編(1972)『ハワイ日本語学校教育史』ハワイ教育会
- 海外移住資料館(2017)「海外移住資料館だより」No.45
- 国際協力事業団(1990)『パラグアイ及びボリビアの戦後集団移住地における子弟教育』国際協力事業団
- 国立国語研究所(1974)『地域社会の言語生活—鶴岡における20年前との比較』秀英出版
- 小林素文(1982)「ハワイ日系人のバイリンガリズム」『愛知淑徳大学論集』8

- 斎賀秀夫(1977)「発音に揺れのある言葉」『月刊実用現代国語』12
- 島田めぐみ・本田正文(2007)「ハワイ日本語の語彙的特徴」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』58
- 島田めぐみ・本田正文(2008)「日本語新聞に見るハワイ日本語の特徴」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』59
- 滝島雅子(2015)「「10 + 助数詞」の読み」『放送研究と調査』2015年2月号
- 滝島雅子(2016)「「数詞 + 助数詞」の発音とアクセント～変化の動向と新辞典への反映～」『放送研究と調査』2016年9月号
- 田島久歳(1996)「ガアラニー語・スペイン語バイリンガル社会の形成—パラグアイのガアラニー・ジョパラ語形成におけるスペイン語の影響」『ラテンアメリカ・カリブ研究』3
- 田野村忠温(1990)「現代日本語の数詞と助数詞—形態の整理と実態調査—」『奈良大学紀要』18
- 丹保健一(1991)「「十本」は「じっぽん」か「じゅっぽん」か—「十」の仮名表記と発音をめぐって—」『金沢大学語学・文学研究』20
- 中東靖恵(2011)「パラグアイ日系社会におけるアクセントの継承と変容—パラグアイの広島県人家族を対象に—」『社会言語科学』13(2)
- 中東靖恵(2018a)「言語研究者としての社会への貢献：学問の継承・展開と新たな発展(第41回研究大会シンポジウム社会言語科学会20年の軌跡とこれから：徳川賞受賞者からの提言)」『社会言語科学』21(1)
- 中東靖恵(2018b)「ブラジル日系移民社会における「コロニア語」の位置」『岡山大学文学部紀要』170
- パラグアイ日本人会連合会編(1987)『パラグアイ日本人移住五十年史—栄光への礎』パラグアイ日本人会連合会
- パラグアイ日本人会連合会編(2007)『パラグアイ日本人移住70年誌—新たな日系社会の創造1936～2006』パラグアイ日本人会連合会
- パラグアイ日本人会連合会編(2017)『パラグアイ日本人移住80年記念誌—変わりゆく日系社会』パラグアイ日本人会連合会
- ハワイ日本人移民史刊行会編(1964)『ハワイ日本人移民史』ハワイ日本人連合会
- 半田知雄(1952)「ブラジルにおける日本語の運命」『時代』15
- 半田知雄(1970)『移民の生活の歴史—ブラジル日系人が歩んだ道』トッパン・プレス
- 比嘉正範(1972)「ハワイの日本語」『安里源秀教授退官記念論文集』英宝社
- 比嘉正範(1983)「「社会方言学」の樹立を目指して」『現代方言学の課題1』明治書院
- 広島県編(1993)『広島県移民史 通史編』広島県
- ブラジル日系人実態調査委員会編(1964)『ブラジルの日本移民 記述篇』東京大学出版会
- フラム移住地入植30周年記念誌刊行委員会編(1986)『みどりの大地—フラム移住30年のあゆみ』フラム移住地入植30周年記念誌刊行委員会
- 文化庁(1975)『言葉に関する問答集1』大蔵省印刷局
- 文化庁(2004)『平成15年度 国語に関する世論調査』国立印刷局
- 馬瀬良雄(1981)「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125
- 馬瀬良雄(1983)「東京における語アクセントの世代的推移」井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究(昭和57年度科学研究費補助金研究成果報告書)』
- 馬瀬良雄編(1994)『広島市方言アクセント辞典』中野出版企画
- 馬瀬良雄(1994)「台湾・韓国日本語学習者の日本語音声の特徴と日本語教育への提言」『日本語研究』14
- 馬瀬良雄(1995)「広島市方言アクセント—アクセントの型と音声的相を中心に—」『フェリス女学院大学国文学論叢』フェリス女学院大学国文学会
- 馬瀬良雄(1996a)「広島市方言アクセント—音韻論的解釈を中心に—」『言語学林1995-1996』三省堂
- 馬瀬良雄(1996b)「テレビと地域語の変容」『日本語学』15(10)
- 馬瀬良雄・小橋裕恵・竹田由香里・中東靖恵(1995)「広島市方言における語アクセントの動態」『音声学会会報』210
- 馬瀬良雄・佐藤亮一編(1985)『東京語アクセント資料(上・下)』(文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集)
- 馬瀬良雄・竹田由香里・中東靖恵(1995a)『山陽地方岡山—広島—下関ライン方言アクセントグロットグラム(地理年代図)集』フェリス女学院大学馬瀬研究室

- 馬瀬良雄・竹田由香里・中東靖恵 (1995b) 「グロットグラムによる岡山—下関方言アクセントの研究」『日本音声学会全国大会予稿集』
- 馬瀬良雄・竹田由香里・中東靖恵 (1995c) 「広島市方言語アクセントの特徴と世代的変動—『広島市方言アクセント辞典』の資料をもとに—」『日本方言研究会第61回研究発表会発表原稿集』
- ラパス移住地入植50周年史編纂委員会編 (2006) 『みどりの大地—ラパス移住地50年のあゆみ』ラパス移住地入植50周年史編纂委員会
- Lipski, John M. (1994) *Latin American Spanish*. New York: Longman.
- Rubin, Joan. (1968) *National Bilingualism in Paraguay*. The Hague: Mouton.
- Stewart, Norman R. (1967) *Japanese Colonization in Eastern Paraguay*. Washington, D.C.: National Academy of Sciences.